

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第44回 第10.3.7.3節～第10.4.3節

2019年10月15日

小田 勝

302頁「10.3.7.3 その他の形容動詞を作る接尾辞」では、①の「-かなり」に語例「はやりか・雅びか・ゆくりか」を、⑤の「-らかなり」に用例、

・…とあれば、負けじとてけ憎らかに（出羽弁集・詞書）

を追加する。「ゆくりかなり」は「急に、だしぬけに」という意味なのだが、現代人の語感と相当のずれがあって、誤解されそうである。

③の「-やかなり」は、一覧を眺めると、良い意味の語が多いように感じるかもしれないが、「醜<sup>みにく</sup>やか」のような語もある。また、①の下に、「-そかなり」の項目を追加する（語例「あはそか・おろそか」）。名詞「様<sup>やう</sup>」も「-やうなり」という形容動詞を作る。語例「いかやう・おほやう・斯<sup>か</sup>うやう・斯<sup>か</sup>くやう・斯<sup>か</sup>やう・離<sup>か</sup>れやう・異<sup>こ</sup>やう・此<sup>こ</sup>の頃<sup>ころ</sup>やう・然<sup>さ</sup>やう・然<sup>さ</sup>るやう・一<sup>ひと</sup>やう」など。「ふくやか／ふくよか／ふくらか」（動詞形は「ふくる」）のように、3形あるものもある。

302頁「10.3.8 タリ活用形容動詞」。タリ活用形容動詞の全活用形の用例をあげ得ない。用例(1)(2)は終止形、(3)(4)は連体形、(5)は連用形の例であるので、ここに、已然形の例をあげておく。

・道路に駕をまげて（＝車ヲ停メテ）後会を契ること、かつは率爾たれば（＝軽々シイノデ）（文机談）

「10.4 副詞」では、304頁用例(13)の類例、

・やうやうづつもこそは〔約束ノコトヲ〕し候はめと思ひ候ふを（古本説話集 67）

用例(14)～(16)の類例を追加する。

・つゆの御いらへも申されで（とはずがたり）

擬態語も名詞として用いられる（現代語でも「いらいらが募る」のような言いかたがある）。

・その儀式いまだほのぼの（＝夜明ケ）のほどに、主上出て南面におはします。（続古事談）

・五月二日ほのぼの（＝夜明ケ）に人走りて（竹むきが記）

同頁「10.4.1 状態副詞」の用例(3)～(6)は擬態語・擬声語の例。これは、あげ出

せば切りがない。

- ・火の中にうちくべて焼かせ給ふに、めらめらと焼けぬ。(竹取)
- ・山風に峰の笹栗はらはらと庭に落ち敷く大原の里(山家集)
- ・鳥のいと近くかかと鳴くに(枕93)

用例(7)は、第10.4.6.1節に移動する。

305頁「10.4.2 程度副詞」。「あまた」は動詞しか修飾しないと書いたが、上代では形容詞に係る程度副詞の用法がある。

- ・鳥じもの海に浮き居て沖つ波騒くを聞けばあまた悲しも(万1184)
- ・草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも(万3184)

用例(4)～(8)の類例を追加する。

- ・御変改もいまさらいとど罪なれば(文机談)

「いと明日に参り侍らむ」(紫日記)は、「明日早朝」の意である。

「10.4.3 陳述副詞」。307頁の2つの◆に示したように、「呼応の副詞」といわれるもののその呼応が義務的であるか否かは、詳しく調べる必要がある。2つ目の◆の「をさをさ…肯定形」の例を追加する。

- ・人目憚りて、思し召し入れぬやうにもてなさせ給へども、御気色はをさをさ著かめり。(源家長日記)

現代語の「もし」は、必ず仮定条件内で用いられるが、古代語の「もし」はそのような制約がない。

- ・もし(=モシカシタラ)、狐などの変化にやとおぼゆれど(源・蓬生)
- ・もし(=万ーニモ)雨雪の障りだになくて、のどかにめでたし。(中務内侍日記)

従って、次例の「をれば」を、「もし」を伴うことを根拠として、仮定形であると主張することはできないであろう(だから、458頁の◆は再考が必要かとも思われる)。

- ・もし狭き地にをれば、近く炎上ある時、その災をのがるることなし。(方丈記)

用例(8)～(11)の類例を追加する。

- ・呉竹の憂き節しげくなりにはけりさのみはよも(=ヨモアラジ)と思ひしものを(続古今1787)
- ・「人にゆめ(=ユメ知ラスナ)」など言ふ女の、逢はねば(為信集・詞書)
- ・よもよも(=ヨモ忘レジ)と頼めし君が言の葉は秋立ちぬればかれがれになる(散木奇歌集)